

理由で「龍脈」が断ち切られたまま、約60年が過ぎようとしているようです。

七代目松本幸四郎

と雀亭(すずめてい)

さて、話を「玉淀」に戻します。たまに訪れた玉淀・寄居の景観に、多くの人が感激し、素晴らしいところだといひます。先日は鉢形城址の岸壁を見た若い方から「寄居の人は、毎日、自然の岩盤浴をしている」といわれました。また、ある方は気象の変化で見ることのできる玉淀の「暮靄(ぼあい)」を楽しみに訪れるといひます。

今から100年余り前(1913年)のことです。正喜橋の東袂に七代目松本幸四郎の『別荘が新築したときに祝



大正初期の録音スタジオ。大きなメガホンがマイク代わり。右から2番目が7代目松本幸四郎。2列目中央が佐々紅華。

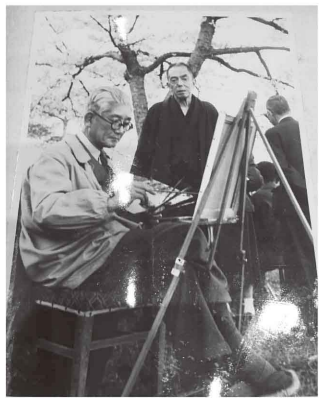
賀会があった。招待客は長瀬から船下りを楽しんで別荘下に着き、「絶えず打ち上げらるる花火は山に響き川に伝わり、未曾有の盛況なりき」と新聞に報じられた。(注3)それから

十数年後、幸四郎の別荘は新開地からの火事が元で消失し東京へ引き上げていきました。入れ替わるように鉢形城址を対岸に望む約3000平米の土地に総檜数寄屋造りの家を昭和6(1931)年から6年もの歳月をかけて建てられたのが現在の京亭です。

佐々紅華が七代目松本幸四郎とのつながりを明治時代の後半から回想している新聞記事(昭和27年1月埼玉新聞)があります。その記事の上段には、終戦間近に玉淀に疎開してきた「安井曾太郎氏◆夫人と満州パン(栗田清美)」という記事が掲載されています。

「幸四郎の玉淀別荘と雀亭隈押しの落款 作曲家 佐々紅華」・「(略)幸四郎マニアになって今でも私の床の間には八代目団十郎に扮した幸四郎の隅押し(芝居の面写)が懸けてあるが、その落款には大正甲寅※大正3(1914)年9月於帝劇七代目松本幸四郎雀亭、と印してある。(中略)私たち(佐々夫婦)が来たころ、その跡には萱葺き屋根のあばらやがあつて庭にたくさん盆栽が並べられ彼の姉が住んでいるのを見かけた。焼ける前か後のことか、こういう愉快な話も伝えられている。彼の実兄矢野島源吉も寄居に住まい、本町南裏の元新井産婆氏宅地に料理屋を営んでいたが、その娘の藤間房子(本名は矢野島ぎん子)が帝劇の女優だった関係で彼が手引きで時の頭官紳商、帝劇の株主、俳優の歴々、大倉喜八郎、外国公使迄引具して豪華な大尺遊びに來遊し、これらの連中が寄居の町を外人とスクラム組んで気炎を挙げて通つたら町

「君恋し」第3回レコード大賞受賞



京亭でのチャーチル会 桜の前に立つ佐々紅華と給筆を持つ藤山愛一郎

佐々紅華は、このスナップ写真のころ、軽い脳梗塞を患い、日ごと一階の縁側で、藤椅子に座つて過ごしていたといひます。そんな紅華の下に一枚の屏風が届けられます。「佐々紅華氏を讃える会」から、病後の健康回復を願つて贈られたものです。紅華が明治、大正、昭和時代に縁のあつた音楽業界の名だたる作曲家、作詞家、歌謡曲の歌手、浅草オペラ、映画の俳優の方からの自署名前が100枚余り、短冊になつて貼られています。古賀政男、吉田正、服部良一、古閑裕而、西条八十、俳優の藤原釜足、浅草オペラの女優だった赤玉ポルトワインの半裸ポスターの松島榮美子など、良き時代の香りが漂います。

昭和36(1961)年1月18日の朝、紅華は亡くなります。息を引き取る際にこんなことをいつたそうです。「君恋し」をフランク永井で、「祇園小唄」を伊東深水さんの娘さん(朝丘雪路)でもう一度吹き込んでくれたら思い残すことはないのだが・・・」その希望は没後に叶えられ、同年8月新譜として発売された『君恋し』は

民の中から石を投げつけるものであつたとの事実談ある。(略)大倉喜八郎といへば、渋沢栄一らと共に、鹿鳴館、帝国ホテル、帝国劇場などを設立した財界人。彼らをして遊ぶような寄居の町の姿がまだに想像できません。

安井曾太郎と玉淀桜

もう一人、玉淀文化の巨匠として東洋のセザンヌとまでいわれた画家・安井曾太郎(1888-1955)を挙げなくてはならないでしょう。昭和20(1945)年 中国・北京にて制作中に病む。帯状疱疹による眼病に罹り3月帰京、ただちに埼玉県大里郡寄居町茅町に疎開。終戦前後藤山愛一郎氏の肖像をはじめ寄居にまつわる作品を描きます。

昭和21(1946)年、「安部先生像」「桜」「栗」「T夫人の像」「大観先生」を出品。昭和22(1947)年11月、寄居を引き払い、下落合の自宅に帰ります。わずか2年半という短い期間ですが、安井曾太郎の長男慶一郎氏に嫁いだのが武町の森田鮮魚店(屋号いちもり)の長女・良子さんでした。また、地元住民との交流もあつたようで、佐々紅華作曲の「寄居小唄」にまつわるこんな話があります。作詞は当時秩父線寄居駅に勤める若き文学青年 金子虹(貳次)たかつぐ。彼は武町の鳥羽家に婚として入ります。何かの縁で安井曾太郎に鳥羽家自慢の手打ちうどんをご馳走するといつたら、紋付はかま姿で現れたとか。巨匠らしい振る舞いに思わず笑いが込み上げてきます。お札にと小さな水彩画を置いていつたようですが、今はありません。

その年の「第3回レコード大賞」を受賞したのでした。

今年が浅草オペラ生誕100年。後の100年に日本が、寄居町がどうなっているか想像もつきませんが、変わらないのは「日本人なればこそ」と晩年語つていた佐々紅華の思いと同じではないでしょうか。

「それタンゴだ、やれブギだトダンスにジャズにうつつを抜かず青年子女もさすがに正月ともなれば和服への愛着を断ち難く、また日本髪への憧れの捨て切れぬもの「日本人なればこそ」(中略)外からの栄養の摂取ももちろん必要であるが、一面、内に潜む私たち祖先の粒々辛苦によつてもたらされた珠玉のような文化的財産の真の美しさ、貴さを深くたずねて、さらに大きく育んでいくことが私たちの果たすべき大きな責務の一つといえるのではなからうか」。

スマホやメールにLINEと複雑につながっている現代。しかし、それらがあつたくない時代になつていった巨匠たちの世界、そして彼らが訪れた寄居。意味あつてのことと思う。それらを解き明かすのも、現代(いま)この寄居町で暮らす私たちの「なればこそ」ではないのでしょうか。

引用・参考文献

- 注1・2 「富士山、2000年の秘密」 戸矢学(寄居町本町出身)
- (注3) 「寄居日和」 埼玉新聞 渡辺泰伸
- 妻・佐々紅華のスクラップブックより
- 本文協力 再発見佐々紅華の会 会長 大谷州弘
- ※文中一部推測を含みます

佐々紅華年譜

平成29(2017)年	浅草オペラ生誕100年
昭和36(1961)年	1月18日没 この年リバイバル曲「君恋し」が第3回レコード大賞を受賞する
昭和11(1936)年	以降、舞踊小唄の作曲と「日本音楽理論ノート」の執筆に専念
昭和6(1931)年	埼玉真寄居町玉淀に枕流荘 虚羽亭(ちりゅうそうきょてい)を構築
昭和5(1930)年	日本コロムビア入社 新民謡、映画音楽 舞踊小唄を作曲
昭和4(1929)年	日本ビクター入社 「君恋し」「祇園小唄」「浪花小唄」唐人お吉などヒット曲を出す
大正15(1926)年	12月25日 大正天皇崩御
大正13(1924)年	浅草オペラ 北海道東北巡業
大正12(1923)年	9月1日 関東大震災 浅草オペラ崩壊

大正6(1921)年	10月浅草大区で「東京歌劇座」を旗揚げ、自身の手によるミュージカル「カフィーの夜」を公演 浅草オペラの嚆矢となる
大正6(1921)年	1月22日 歌舞劇「女軍出征」上演 浅草オペラの歴史が始まる
大正2(1913)年	東京蓄音商会入社 「お伽歌劇」の作曲 「茶目子の目」「穂ちゃんの絵本」など
明治45(1912)年	7月30日 明治天皇崩御
明治43(1910)年	日本蓄音商会(現ロムビア)入社 レコードポスターなどの製作に携わる
明治40(1907)年	蔵前高等工業学校(現東工大) 図案科卒業
明治23(1900)年	一家で横浜に転居 父は二井の生糸商
明治19(1886)年	7月15日 東京根岸に生まれる 本名一郎